

(6) 不耕起田植え

ア 適地

水保ち：良（水保ち並以下は不可）

多年生雑草の多発田は不適

イ 技術の概要：

稲を刈り取ったままの田面状態で、耕起・代かきを一切しないで移植する。

基本的には前年の条間に植え付けるが、植え付け条部分のみ5cm幅に浅く耕起するので、稲株の上でも植え付け精度は高い。

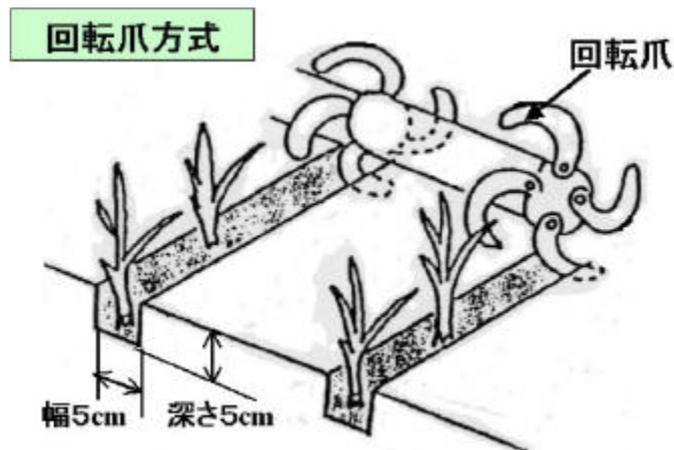


図 - 14

不耕起田植機の回転爪

ウ 技術のメリット

耕起・代かきしないので、濁水は全く発生しない。移植時の田面水の懸濁も少ない。

秋耕、春耕、代かき作業が省略できる。

移植時に枕地が荒れない。

移植作業、収穫作業は田面が固いので能率的に行える。

土をこねないので土壌が強還元状態にならない。

エ 技術のデメリット

専用の田植機が必要である（同じ機械で代かき田も田植え可能）。

田植機の機構は、表層代かき田植機とほとんど同じで、表層代かき田植機のロータ部分を交換することにより、不耕起田植機となる機種も販売されている。

代かきしないので水保ちが悪くなりやすく、用水が多く必要である（湖東町の例では、5～6月の用水量が慣行に比べて3割以上増加した）。

移植前に浸透移行型茎葉処理除草剤の施用が必要である。また、代かきしないので多年生雑草が残りやすいく、後期除草剤を必要とする可能性が高い。

耕土が硬いので株張りしにくい。

オ 付帯技術

側条施肥は部分耕される条に施用されるが、代かき土壌に比べてチッソの利用効率が低くなる。その対応として育苗箱への被覆肥料施用技術を採用するとよい。

茎数確保のために、移植数日前に苗箱へ追肥する（チッソ 2 g / 箱程度）。
漏水抑制のために水田の排水側 L 字部分のみ耕起・代かきすると効果的である。
冬季の乾燥により、土壤に亀裂が入ると減水深が大きくなるので、冬季も尻水戸および暗渠は解放しない。

カ 作業方法

移植 2 ~ 3 週間前に浸透移行型茎葉処理除草剤を散布する。面積が大きいのでブームスプレー等を利用するとよい。

畦塗り機を用いて、畦畔を補修しておく。

移植の 1 週間前に入水し、土壤を柔らかくしておく。

漏水が心配される場合には、移植数 ~ 前日に排水側 L 字部分（ロータリ幅）を耕起・代かきする（入水後ロータリ耕 2 回）。

移植当日は、代かき田と田面状態が異なるので、スリップ率を考慮して植え付け密度、苗掻き取り量を調節する。

側条施肥は部分耕手前に施用できる。チッソを苗箱に施用した場合は、P K 化成を施用する。

移植後は普通の栽培管理とほぼ同じであるが、茎数が少ない場合は追肥する。



写真 - 19
不耕起田植え作業



写真 - 20
不耕起田植機
(植付部分のみ耕す回転爪がついている)